



学校だより

平成30年10月31日
練馬区立田柄第二小学校
校長 谷田 弘子

HP <http://www.tagara2-e.nerima-tyky.ed.jp> e-mail info@tagara2-e.nerima-tyky.ed.jp

教育目標:元気な子ども・考える子ども・思いやる子ども

No.488

「上手に叱る」

副校長 横尾 康幸

さる土曜日、家の近くの郵便局に行った時のことです。

帰り際、駐車場の辺りで大きな声がするので何事かと思い、そちらの方を見てみました。すると、3、4歳くらいの小さな子供が直立不動の姿勢で立っていて、その子に対してお母さんと思われる女性が怒鳴り声を上げていたところでした。近くにいて話を聞いたわけではないので詳しいことは分かりませんが、子供はただただ怒鳴り声の恐怖に耐えているようにしか見えませんでした。見るに見かねていよいよ止めに入ろうと思った時、その女性は子供の手を強く引きながらその場から立ち去ってしまいました。

もしかしたら、その子供は、（駐車場だったので）怒鳴られるくらい危ないことをしてしまったのかもしれません。ただ、子供の様子を見ている限り、あのような言い方では、また怒鳴られるのが嫌だから気を付けるようにはなるかもしれませんが、怒鳴られた理由が分からず、決して反省はできないだろうなと思いました。

学校でも、子供同士のけんかの仲裁に入ったり、いけないことをしてしまった子供の指導に当たったりすることがよくありますが、大人が思っている以上に、子供は自分のことを振り返って、素直な気持ちで反省することができていると感じています。また、自分でしっかり考えて決めたことは、人から言われたことよりよく守っているように思えます。

「叱る」と「怒る」は違うという話はよく聞きます。叱ることは「相手によりよい方法を教える」ことで、怒ることは「自分の感情を相手にあらわにする」ことです。「こんなにあなたはいけないことをしたのだ」と怒っている感情をぶつけることはあるかもしれませんが、本当に子供の心に働きかけたいのなら、一度は怒鳴った（怒った）としても、気持ちを落ち着けて、「なぜ、いけないのか」、「どうすればよかったのか」、「次に似たようなことがあったら、どうすればよいのか」ということを子供自身に考えさせることが必要だと思います。

子供が素直に心を開いてくれるためには、普段の関係作りも大切です。子供の話に十分に耳を傾けなかったり、褒めることがなく、いつも叱ってばかりだったりしたら、子供の心はだんだん閉じていって本当のことは話してくれなくなってしまうかもしれません。そうでなくても学年が上がっていくにつれて、子供は小さかった頃のように何でも喋ってくれなくなっていくってしまうものです。

大人は日々の生活の中でどうしても感情的になってしまうことがあることは、私自身も実感しています。ですから、自分が人から叱られた時や注意をされた時、一番効果のあったのはどのような時だったのかという、自分自身の経験も思い出しながら、皆で上手に叱れる大人になっていけたらと思います。